



『新時代の日本語教育を めざして』

早稲田から世界へ発信

宮崎里司編著 川上郁雄・細川英雄著

二〇〇六年三月刊

明治書院

宮崎 里司

A5判 二七二ページ

定価 二〇〇円

二〇〇五年四月から、『日本語学』で連載された、『新時代の日本語教育をめざして』早稲田大学大学院日本語教育研究科の取り組みをもとに、加筆訂正された本書は、近年、日本語教育の分野で、内外に積極的な発信を行う、研究科三名の教授が、第二言語習得、年少者日本語教育、及び言語文化教育の分野で、これまでの日本語教育の問題点を明らかに、問題解決のための処方箋を調合する。日本語教育をミクロ・マクロの両面から、ダイナミックに捉え、ことばや文化、社会と有機的に結合しあう日本語教育に関心ある者の必読書である。

序章に続く、第一部では、研究科の理念と設立の経緯を説明し、第二部では、三人が分担執筆を行っている。具体的には、1、2章で、宮崎が、「座標軸を問い直す日本語教育への提言」や「産学官連携事業…地域

社会との協同をめざす日本語教育」といったトピックで記述し、川上は、3、4章で、「年少者日本語教育学の視座」及び「年少者日本語教育学の実践と展望」という観点から、そして細川が、5、6章において、「理論と実践の統合」や「新しい理論の構築へ」で、多面的な理論構築を図っている。

第三部では、研究科の大きな柱である、「理論研究」、「演習」、そして「実践研究」のうち、とくに日本語教育を取り巻く社会的文脈性を重視し、大学と社会を結ぶ学外での実践活動として、宮崎が、墨田区での産学官連携活動、川上が、新宿区での年少者日本語教育の取り組み、そして細川は、言語文化研究所NPOの実践を紹介しながら、そうした活動が、大学院の研究活動とどのような相関関係を築いているのかを解説している。

最後の第四部では、執筆者の研究室に在籍する大学院生が選定した、レビューつきの書籍紹介文が掲載されており、各研究室を志望する受験生必読の傾向と対策に仕上がっている。これからの日本語教育の多様性を見据えた「囁み応え」のある一冊で、視野を広げていただきたい。

(みやざきさとし・早稲田大学教授)